

## 歴史の

## 奥医師の娘

— 自害するよりしるこ三杯 — (一八五八〜六九年)

1

わたくしは、奥医師をつとめる桂川甫周の娘みねと申します。桂川家は、七代にわたって將軍さまにお仕えしてまいりましたオランダ流外科医でございます。

奥医師はお城で、將軍さまのご親族と、大奥の局さま、奥女中の診療をお役めとしてまいりました。

桂川の貧乏屋敷は評判でございました。武士なら下っ端に近い給与ですが、格式はお大名と同等ですので、父は登城にも、大名のように行列を仕立て駕籠に乘ります。將軍家のご紋、葵の葉箱が通りますと、通行人は道を開き、父と葉箱にうやうやしく敬礼したものでございます。

幼いときからわたくしも、外出は駕籠でございました。ですからろくに途中の景観も目にはいらず、街のようすもわかりません。外を走りまわりたくてたまりませんのに、門を出ようとすると、つかまってしまいます。

そこで、屋敷に来るいたずら好きそうな三人の若者を味

方にしました。来客があると家中にスキができます。そういうとき、味方のだれかにおんぶしてもらって、さっと門から駆け抜けるのです。洋輔さんの背中で大川を見たときはびっくりして、歓声をあげました。

「わあっ、こんなに大きな池があるなんて知らなかった」隅田川をそのころは大川と申しておりました。そのときの景色のすばらしさは忘れられません。

三朗さんのときは、浜御殿(現・浜離宮公園)の大門まで行きましたし、諭吉さんには諭吉さんの長屋までおぶさって行ったこともございます。玄関もない、二部屋きりの住まいでした。四歳のころと思います。

いろんな人におぶさったなかでは、いちばん背中が大きくて、乗り心地がよいのは、諭吉さんでした。

父は、オランダ語の辞書を編纂し発行したほどの学者です。その辞書が高く売れたおかげで、だいぶ裕福になりました。

オランダ語で西洋文化を学ぶことを蘭学と申します。桂